

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

出版の現状

山岡洋一

- 冠をつけよう - 50年読みつがれる翻訳、100年読みつがれる著書
出版業界の低迷から抜け出すには、50年読みつがれる翻訳、100年読みつがれる著書を目指すのが最善の方法だと思える。その際に冠をつけて資金を確保できれば、出版は様変わりするだろう。

私的ミステリ通信（第5回）

仁木めぐみ

- 江戸川乱歩と海外「探偵小説」
戦後、海外ミステリの普及につとめた江戸川乱歩の評論活動を紹介する。

翻訳の道具

山岡洋一

- 辞書をめぐる3つの話
翻訳の世界の格言「たかが辞書、信じるは馬鹿、引かぬは大馬鹿」をめぐる話と、山口翼編『日本語大シソーラス』の紹介。

誰も教えてくれなかった英語（第9回）

柴田耕太郎

- 掛かり方 その1
掛かり方を定期的に説明された覚えはまず無い。だが準則といえるものはあるのであり、また慣れを常識・論理・文脈などと刷り合わせれば、読む精度を確実に高めてゆける。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

かんむり

冠をつけよう

50年読みつがれる翻訳、100年読みつがれる著書

ここ何年か、出版の世界では二極化が進んでいるように思えた。一方で100万部を超える大ヒットがごく少数ながらある一方、大部分の本は売れなくなっていた。10年前なら2万部は売れたはずと思える本が5000部ほどしか売れなくなった。5000部だった本は2000部も売れなくなった。

今年は様子が少し変わった。二極化が解消に向かっているようなのだ。それはいいことではないかと思えるかもしれないが、要するに100万部を超える大ヒットがほとんどなくなって、どの本も売れなくなっているようなのだ。今年はひどいというのが、たいいていの出版関係者の意見だ。

今年もひどいというべきだろう。去年も、ハリポタを除けばひどかった。来年もたぶん、ハリポタを除けばもっとひどいだろう。少なくとも何年間かは低迷が続くのではないだろうか。出版業界が近く元気を取り戻すと予想できる要因は見当たらない。逆に、悲観的に考えるしかないと思わせる要因がいくつもある。

悲観的になるのは何よりも、出版業界が勝てるはずのない戦いを戦っているように思えるからだ。「分かりやすく読みやすく短い本」「二時間で読める本」が売れると考えている。出版社がそう考え、書店がそう考えている。しかし、そんな本では書籍という媒体の良さが活かせるはずがない。分かりやすさや取っつきやすさを競っているのは、雑誌や新聞に勝てない。テレビやラジオに勝てない。インターネットに勝てない。携帯にすら勝てない。書籍という媒体の強みはまったく正反対のところにあるはずだ。

書籍の良さは、新聞や雑誌の記事を読んだぐらいでは、テレビを観たぐらいでは、講演を聞いたぐらいでは、インターネットで調べたぐらいでは、とても味わえない感動を味わえる点、とても理解できない難しい問題を考えることができる点にこそある。再読し、三読し、何回読んでも新しい発見があり、新しい感動がある、そういう深みにこそある。若いときに読んだものを老人になってまた楽しめるのが本の良さだ。「分かりやすく読みやすく短い」ものがいいのなら、雑誌や新聞にかなうわけがない。テレビやラジオにも

かなわない。

書籍という媒体の強みを活かした本を出版し、売っていかねば、出版業界はいまの苦境を抜け出すことができないだろう。行き詰まったときは成功例をみるのがいい。成功例をみれば、行き詰まりを突破する方法を考えたときのヒントが得られるかもしれない。他の業界の成功例をみるのもいいし、外国の成功例をみるのもいい。だが、国内の出版業界にも成功例はある。それもとんでもなく意外なところに。

この文章を覚えているだろうか。

真理は万人によって求められることを自ら欲し、
芸術は万人によって愛されることを自ら望む。

そう、岩波茂雄「読書子に寄す - 岩波文庫発刊に際して」（昭和2年）の冒頭部分だ。岩波文庫の最後にならず入っているの、読んだことはなくても、見覚えのある人が多いのではないだろうか。

岩波書店といえいまでは見る影もないが、岩波茂雄の時代にはもちろん違っていた。明確な理念と使命感を掲げ、誇りのもてる商品を思い切った低価格で提供し、強力なブランドを確立し、収益性が高く、持続する事業を築き上げた。ビジネス・スクールの事例研究に取り上げられても不思議ではない成功ではないだろうか。

とくに岩波のブランド力はすさまじかった。ある種の権威になり、絶対的な権威にすらなった。岩波書店から著書や訳書をだしてもらえるようになれば、一流の仲間入りができたといえるほどであった。だが、権威は墮落する。絶対の権威は絶対に墮落する。いつしか権威に内容が伴わなくなり、やがて、王様が裸であることに読者も気づくようになり、さしもの販売力が衰え、収益性が悪化して、存続すら危ぶまれるほどになった。岩波はどうなっているのかと、業界の事情通に聞いてみた。「敗北を抱きしめているところだ」という。「大往生」の夢を追っているという意見もあるそうだ。なるほど。

いまは敗北を抱きしめているとしても、岩波茂雄が

作り上げた事業が少なくとも数十年にわたって成功を収めたことはたしかだ。新しもの好きが使いたがる言葉を強いて使うなら、岩波の「ビジネス・モデル」が数十年にわたって有効だったことはたしかだ。経営の王道を歩んでいたこともたしかだ。理念、ビジョン、使命感を掲げた「読書子に寄す」が古臭いと感じる人は、最新の経営書を読んでいないに違いない。アメリカの最新の経営理論で欠かせない要素になっているのがまさに、理念、ビジョン、使命感なのだ。岩波茂雄は75年も前に、それを見通していたかのように、自社の製品の一点ずつにいうならば「ミッション・ステートメント」を掲げる方法をとっていたのだ。アメリカの優良企業でも、自社製品の一点ずつに理念を書き込む方法まではとっていない。経営のグルが岩波の事例を知ったら、たぶん感激するはずだ。

出版市場の荒廃が鮮明になってきた今の感覚で読むと、「読書子に寄す」は新鮮ですらある。「外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし」という言葉は、著者の権威や知名度に頼って内容を顧みざる出版社や、内容を顧みざるもタイトルと装丁に至っては厳選最も力を尽くしている出版社に読んでもらいたいと思う。岩波茂雄が掲げたのは、文化事業を担う出版社の使命であり、理想である。

出版は文化事業だ。そういうと、とんでもない、営利事業だという反論がすぐに返ってくるはずだ。とんでもない、うちは漫画や下品な本、お手軽なノウハウ本ばかりだしていますから、という意見もあるだろう。だが、売れない本も文化なら、売らんかなの本も文化、権威とやらに衣装を着せた本も文化なら、下品な本も文化、漫画も文化（それもすぐれた文化）、タレント本も文化だ。もちろん、お役所言葉の文化事業、つまり文化の名のもとに箱物を作ったり、イベントを開いたりするのに税金を注ぎ込む事業とは違う。だが、出版事業が文化を対象とした事業であるのは確かだ。

問題はもちろん、少し違ったところ、文化的な価値と採算とは矛盾すると考えられているところにある。大手の出版社でいえば、第一線の編集者はたいてい文化的な価値を重視する。誇りをもてる本を作りたいと願っている。管理職や経営陣は採算に責任を負っているから、売れる本を作れと現場に圧力をかける。これに似た図式が大手出版社と小規模な出版社の間にもある。大手出版社は売れる本を目指す。小規模な出版社は採算を無視して、少なくとも著者・訳者と経営者兼編集者の人件費を無視して、マイナーな本をだす。

岩波茂雄の言葉はまさにこの点で新鮮だ。「生命ある不朽の書を少数者の書齋と研究室より解放」と宣言しているのだ。つまり、文化的な価値が高い本を「少数者」に届けるのではなく、「民衆」に届けると宣言しているのだ。「その性質上経済的には最も困難多きこの事業」がやがて、収益性の高い事業になったのは、この姿勢があったからだ。文化的な価値を高く掲げることで、経済性を確保したのである。

繰り返すが、これが古臭いと思うのであれば、最新の経営理論を知らないのだ。経営は結果がすべての世界だ。経営の善し悪しは結果によって、つまり収益性によって判断される。儲かる経営がすぐれた経営である。だが、利益のために利益を追求する経営姿勢ではうまくいかないというのがアメリカの最新の経営理論で常識になってきた。ビジョンと理念の実現が目的であり、利益は手段にすぎない。手段でしかない利益を目的にした経営は悪循環に陥って、利益をあげられない。だから、最新の経営理論では、利益を増やす方法よりも理念やビジョンに注目するようになっている。もちろん、崇高な理念を掲げていても、高収益の事業を構築できないのであれば、肝心の理念を実現できない。売れなくても良書をだすという姿勢では、良書をだせないし、良書を読者に届けることができない。理念と経済性を両立させるのが経営なのだ。

出版業界でこの経営理論を活かすとするれば、文化事業としての出版の意味をもう一度考え直し、関係者全員が誇りをもてる本、情熱をもって取り組める本を、幅広い読者に向けて出版し売っていくことを考えるしかない。書籍という媒体の強みを活かせるものを出版し売っていくしかない。書籍という媒体の強みを活かさず、「分かりやすく読みやすく短い本」「二時間で読める本」で大ベストセラーを狙うやり方では、出版の市場が荒れていくばかりだ。

岩波なんぞの例をだすから誤解されるかも知れないが、誇りをもてる本、情熱をもって取り組める本とは、いわゆる「良書」であるとはかぎらない。どんなジャンルでも、誇りをもてる本を情熱をもって作ることはできる。本物を作ろうとせず、お手軽、お気楽に作るうとするから、誇りも情熱もなくなるのだ。

ではどうすればいいのか。出版業界の現状では、「50年読みつがれる翻訳、100年読みつがれる著書」を目指すのが最善の方法であるように思える。年間に8万点も出版される本のなかで鮮明な差別化をはかり、新たなブランドを築いていくには、長く読みつがれる

本を目指すのが最善だと思えるのだ。

長く読みつがれていく本を目標にしていれば、何点かに1点はほんとうに長く読みつがれる本になるだろう。そういう本が増えれば、長期的にみて収益性が高くなるはずだ。既刊本で儲けるのは、もちろん出版事業の基本であり、基本に戻るのはいつでも一番確実な方法である。

だが問題もある。長期的にはどうであれ、長期的にはわれわれは皆死んでいるという有名な言葉もある。長期的には高収益になる可能性が高い事業でも、短期的に採算が取れないのであれば、実現するはずがない。短期的な実現可能性を考慮すれば、長期にわたって読みつがれる本は、よほどの幸運に恵まれなにかぎりではでないだろう。

長期的にみれば高収益になる可能性があっても、短期的にみればまったく採算が取れないというギャップを何らかの方法で埋めなければ、「50年読みつがれる翻訳、100年読みつがれる著書」を目指すことはできないように思えてならない。ギャップを埋める方法はあるのだろうか。

短期と長期のギャップをどう埋めるのかを考えると、まずは当然ながら、ギャップの性格を把握しなければならない。長期にわたって読みつがれる本を出版するのが短期的な採算という点から難しいのはなぜか。

短期的な採算を出版会社にとっての採算という観点だけから考えていけば、答えはでてこない。出版という事業は、何部売れなければ採算が取れないというようなものではない。極端に言えば、部数は10部でもやり方次第で採算がとれる。方法は簡単、定価を上げればいい。だからたとえば、部数が減っているのであれば、定価を上げてオン・デマンドで出版しようという話になる。売れもしない本を大量に刷って在庫をかかえるから赤字になるので、注文を受けたときに注文の部数だけ刷ればいい。これで採算が取れる定価にしておけば、出版社にとってリスクがなくなるというわけだ。出版社の採算という観点だけから見れば、まったく正しい答えだ。だが、肝心な点を忘れている。

肝心な点とは、著者・訳者がいなければ出版事業が成り立たないことだ。そして、著者・訳者は霞を食って生きているわけではない。部数を絞り込み、極端な場合はオン・デマンドで出版すれば、たしかに出版社はリスクを負わないかもしれないが、著者・訳者は食

べていけなくなる。だから質の高い原稿はでてきにくくなる。自費出版でも本をだしてみたい人は多いので出版社の自費出版部門は栄えるだろうが、本筋の出版部門は先細りになりかねない。

この点にこそ難しさがあるのだ。長期にわたって読みつがれる本をだすには、著者・訳者がそれに値する仕事をするしかない。ところが本がここまで売れなくなると、長期にわたって読みつがれる本を書くか訳すのが難しくなっているのだ。

岩波はこの問題をどう解決したのだろうか。簡単な解決策をとっていた。岩波というと反体制というイメージがあるので不思議だと思われるかもしれないが、著者・訳者の生活をお国に保証してもらっていた。大学教授の肩書ももらい、一生の生活を保証されて、長く読みつがれる本を書くか訳す余裕を得ていた人たち、その見返りとして、価値が高い本を書くか訳す責任を負っていた人たちが、岩波文化を支えていた。同時に、お国が与えた大学教授という肩書が、岩波の権威を支えていた。昭和の初めまでの時代には、お国の生活保証と権威が文化を支えていたのだ。岩波は国家が文化を支える時代背景をうまく利用して事業を築き、そのような時代背景が消えるとともに、衰退への道を歩むようになった。その点で岩波茂雄も時代の子たるを免れえなかったといえるだろう。

今は時代が違う。お国に生活を保証された人たちが長く読みつがれる本を書くとも訳すとも期待できなくなっている。著者や訳者の多くは生活の保証がないので、短期志向でなければ食べていけなくなっている。生活費を他の方法で稼ぎながら、それもといては不安定な方法で稼ぎながら、著作や翻訳に取り組んでいる人も多い。

「50年読みつがれる翻訳、100年読みつがれる著書」を目指すには、著者・訳者の生活をある程度まで支えられる仕組みを考えるべきだと思う。著者・訳者の収入は印税の後払いが常識だが、アメリカの出版界の常識にならって、前払い(アドバンス)の方式を取り入れれば、長く読みつがれる本がでてくる可能性が高まるように思う。たとえば5年から10年の期間に期待できる印税が前払いされる仕組みがあれば、著者や訳者はじっくりと仕事に取り組める。

もちろん、いまの出版社にはこのようなアドバンスを支払えるような余裕はない。原稿がほとんど完成しているときに、初版印税の範囲内である程度の前払い

に応じてくれる場合があるだけだ。

景気がうんと良くなれば、出版社が雑誌部門の広告収入を活用してアドバンスを支払えるようになるかもしれない。だが、景気が良くなるよう期待するのは愚かなことだ。それに、雑誌部門は長年にわたって出版部門の赤字を吸収する役割を担わされてきたので、長期的な採算はどうであれ、短期的にさらに大きな負担を負うことを快く思うはずがない。アドバンスの方式を取り入れるのであれば、まったく違った方法を考えるしかない。

そこで一案になるのが、冠〔かんむり〕をつける方法である。冠をつけるとは、スポンサーを見つけてその名前を冠することだ。文化事業では、ほとんどの分野でこれが常識になっている。たとえば舞台芸術では、どの分野にも企業名を冠した公演が多い。プロ・スポーツはほぼすべてこれで成り立っている。人気があり、入場料収入が見込める野球やサッカー、ゴルフすらも、冠がなければ成り立たない。

活字メディアでも、新聞や雑誌は広告収入で成り立っている。書籍だけがなぜか、販売収入だけで採算を取るように求められている。もっとも書籍に広告を入れるのはそう簡単ではない。広告は普通、短期的なものという性格があるからだ。長く読まれることを目標にする本に広告を入れても、読者が手に取ったときにはすでに、広告が古くて意味をもたなくなっていることになりかねない。だが、冠なら可能だ。スポンサー名を冠するのが冠だ。社名はそう簡単には変わらないし、個人名（たとえば創業者名）なら変わるはずがないからだ。スポンサーの名前を冠したシリーズを作り、「読書子に寄す」のような理念を1ページで表明すればいい。しかし、冠という形でも、書籍にスポンサーをつけるのは簡単ではない。書籍に冠をつけることにはたぶん、心理的に大きな抵抗がある。

岩波文庫の場合には、前述の「読書子に寄す」が一冊ずつに掲げられている点を見ると、いうならば岩波がみずから冠をつけているともいえる。文庫の出版事業はいかに困難であろうと、出版社が独力で言うという強い意思が「読書子に寄す」に示されているともいえる。だがそれだけではない。岩波文庫には、いうならばお国が冠を付けていた。何々帝国大学教授といった肩書で国が品質を保証し、著者や訳者の生活を保証していたのだ。国の冠があるのだから、企業の冠などつける必要はなかった。

それに、官僚をみればすぐに分かるように、国の力を後ろ楯としている人たちは商業活動を嫌う。企業は「業者」であり、油断のならない連中だと考えている。広告とか冠というと、すぐに商業主義に毒されると考える。だが、時代は変わった。国には文化を支える力も意思もない。国の力に頼りきってはいは、敗北を抱きしめるしかなくなる。国の力に頼っていない人間まで、商業主義とやらを嫌う理由があるのだろうか。たとえば新聞や雑誌は広告媒体であり、広告収入がなければ成り立たないのが通常だが、だからけしからんという人はそう多くないはずだ。書籍に冠をつけて、はたしてほんとうに問題があるだろうか。

出版の市場規模は1兆円に近いが、事業の性格はきわめて零細だ。たとえば、定価2000円の本で刷り部数が5000部とすると、すべて売り切っても定価ベースの総額は1000万円にしかならない。出版社に入るのは、そのうち70%前後なので、700万円ほどでしかない。著者や訳者の収入はもっと少ない。著者印税は高くても10%だから、わずか100万円でしかない。

こんなに零細なのだから、冠をつけてある程度の資金が入ってきた場合の効果はきわめて大きい。舞台芸術の冠公演や、スポーツの冠イベントなどでは、桁がいくつも違うほどの金額が動いている。冠をつけることができれば、出版は様変わりするだろう。

好評発売中

エイミー・チュア 著
久保恵美子・訳

2,300円＋税
4-334-96161-4

富の独裁者
WORLD ON FIRE

誇る経済の覇者：飢える民族の反乱

わずか1パーセントの人間が豊かになるために、残りの人間が尊厳を失っていく。アメリカに支配された世界に未来はあるのか。

世界の論客たちを震撼させた
気鋭の女性学者 衝撃のデビュー作

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6 光文社
<http://www.kobunsha.com>

江戸川乱歩と海外「探偵小説」

今年も読書の秋、そして神保町古書店街の古本まつりの季節がやってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。今回のテーマは「江戸川乱歩」です。江戸川乱歩は日本人の作家ではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、ここでとりあげるのは乱歩の小説ではなく、評論など海外ミステリに関する活動のほうです。乱歩はいわずと知れた日本推理小説界の大御所でしたが、日本の翻訳ミステリ界に大変な貢献をした人でもあるのです。

いきなり私事で恐縮ですが、私が大人の本を読めるようになったのは1980年代の初めでした。ミステリ好きな方の多くがたどった道だと思いますが、小学校中学年の頃に子供用のシャーロック・ホームズに出会い、江戸川乱歩の少年探偵団を読み、その後は学校の図書室で児童用の世界推理小説全集をむさぼるように読みました（あれはものすごいものだったと思います。何せウィリアム・アイリッシュの『幻の女』〔稲葉明雄訳・ハヤカワミステリ文庫〕からメアリー・ロバーツ・ラインハート『螺旋階段』〔ハヤカワミステリ文庫・沢村濯訳〕まであったのですから。後にこれは子供の頃に読んだあの話だ、と思うことが何度もありました。しかしあの『幻の女』を“良い子”が読んで差し支えないように、しかも面白みを損なわずにリライトした訳者の方の力量には頭が下がる思いです）。

やがてだんだんと文庫本でミステリを読めるようになり、たしか最初に読んだのはハヤカワミステリ文庫のアガサ・クリスティ『そして誰もいなくなった』（清水俊二訳）だったと思います。クリスティ、クイーン、カーと区立図書館の棚に並ぶミステリを次々と読みながら、私はこう思いました。もっともっとたくさん面白いミステリを読みたい！でもどこを探せばいいんだろう？

そんな時、私は同じ図書館の薄暗い書庫（目立つところにある文庫コーナーとはかなり離れたところがありました）を探検していて、ある本を見つけました。それは江戸川乱歩『探偵小説四十年』（桃源社など）です。

江戸川乱歩といえば、おなじみ名探偵明智小五郎と少年探偵団シリーズの生みの親です。先ほども書いたように、私にとってももちろんなじみのある名前です。

たが、それ以上に、大きな本の背表紙に金文字で書かれたタイトルが輝いて見えました。『探偵小説四十年』。「探偵小説」という古めかしい言葉が、なぜか私の心をときめかせたのです。しかも四十年！私はまだ本当の「探偵小説」を読み始めてから数ヶ月しかたたないのに、この人はもう（といってもこの本が書かれた当時のことですが）、四十年も探偵小説にかかわってるんだ！いま思えば日本の探偵小説界の重鎮も重鎮、プロデューサー的存在でもあった江戸川乱歩に対して、おそれ多く、失礼極まりない話です。知らないというのは恐ろしいことで、小学生時代の私はこのタイトルだけで乱歩を尊敬したのでした。

『探偵小説四十年』の内容は、乱歩自身の半生や創作を回顧した覚書、英米のミステリの批評や感想などです。私はドロシー・セイヤーズの『ナインティラーズ』（浅羽英子訳・創元推理文庫/門野集訳・集英社文庫）、ロナルド・ノックスの『陸橋殺人事件』（宇野利泰訳・創元推理文庫）、ジョセフィン・テイの『時の娘』（小泉喜美子訳・ハヤカワミステリ文庫）などの古典的な名作の存在を、みなこの本で知りました。ある意味私にとってこの本との出会いは、長年の煩惱の始まりだったといえるかもしれません。

乱歩が評論活動をした時代にはちょうど英米ミステリの黄金期も含まれるので、日本では乱歩が初めて読んだという名作もたくさんあります。江戸川乱歩という人は海外ミステリの日本への紹介に大変な貢献をした人物なのです。今日の翻訳ミステリ界の基礎を作ったと言っても過言ではないと思います。自身の創作ですでに名をなしてから、英米ミステリの評論活動をした乱歩は本当にミステリが好きだったのでしょう。横溝正史（正史には多数の訳書があるのですが、そのうちの一冊にウィップルという作家の『鍾乳洞殺人事件』というミステリがあり、この作品からアイデアを得て『八つ墓村』〔角川文庫〕を書いたといわれています）ら当時の人気作家と海外ミステリについて熱く語り合ったという記述も残っています。戦争中まったく情報が入らなくなっていた英米のミステリ界の状況を、日本中に知らせたいという気持ちも持っていたようです。

乱歩には暗い土蔵の中でろうそくをともして執筆していたといわれています。床にはいつくばって鬼気迫る顔で書いているのを見てしまった編集者がいる、という話も伝わっています。どこまでが真実でどこまでが「伝説」なのかはわかりませんが、自邸の土蔵を書斎にしている、そこで執筆していたというのは本当です。しかもこの土蔵の中には内外の探偵小説の膨大なコレクションが納められていました。まさに宝庫というべき土蔵です。

「幻影の蔵 江戸川乱歩探偵小説蔵書目録」(山前謙・新保博久著・東京書籍)はそのコレクションの完全なリストです。邦訳本はもちろんのこと、ペーパーバック、ハードカバーを問わず洋書もたくさんあります。和書も洋書も今では手に入らない貴重なものばかりです。洋書は戦後、進駐軍が放出したものを大量に買い集めたそうです。英米では日本よりさらに絶版、品切れになるのが早いので、今は読めなくなっている作品もたくさんあり、うらやましい限りです。

乱歩は膨大な原書の一冊一冊の背表紙にまるで図書館のようにラベルを貼り、アルファベット順に並べて管理していました。几帳面な性格をしのばせると同時に、ミステリへの愛も感じさせるエピソードです。書き込みのある本も多く、いまや二重に貴重なコレクションになっています。

乱歩の評論や海外ミステリに関するエッセイ集は他にも多数あります。書下ろしではなく、雑誌に書いた原稿を集めたものが多く、重複して収録されている文章もあります。残念ながら現在は絶版になっている本が多いので、ここでは現在新刊でも買える『海外探偵小説作家と作品』(早川書房)という本を紹介させていただきます。ちなみに『探偵小説四十年』は今も絶版になっていますが、最近配本が始まった光文社の江戸川乱歩全集の第28・29巻として近日中に刊行されるようです。

『海外探偵小説作家と作品』は題名の通り、作家ごとに海外ミステリを紹介している本なのですが、主に乱歩が書いた解説をまとめたものです。前書きを見ると「私は早川ポケット・ミステリー叢書の解説を昭和二十八年に十一冊、二十九年度四十六冊、三十年度五冊、合計六十二冊執筆している」とあります。いかに海外ミステリの紹介に深くかかわっていたかがわかります。

収録作家は九十一人で五十音順に並んでいます。そ

のラインナップはなかなかバラエティに富んでいて、カー、クイーン、クリスティはもちろん、エバハート、ラインハートといった現代ではあまりかえりみられていないHIBK派(=もし知ってさえいたら派。この派については回をあらためてくわしく書かせていただくつもりです)あり、スピレイン、チャンドラー、ハメットといったハードボイルドの「古典」ありと、乱歩の「守備範囲」の広さとその当時の時代性を感じさせ、興味深いものがあります。

内容は、もともと解説ですので、作家の略歴やちょっとしたエピソードが紹介されています。たとえば『スイートホーム殺人事件』(ハヤカワミステリ文庫・小泉喜美子訳)や『時計は三時に止まる』(創元推理文庫・小鷹信光訳)などの作品があるクレイグ・ライスの項では、ライスが「タイム」誌の表紙を飾ったことと共にライスの生い立ちと半生がかなり詳しく書かれています。

ライス夫人の経歴は非常に風変わりである。父は画家であつたが、母と共にほとんど本国を外にして、欧州は勿論、印度などにも永く住み、日本にも来たことがあるという放浪的性格の持主であつた。母は本国に帰ってクレイグを生み落とすと、嬰兒を親戚のもとに預けたまま、外国の父のもとへ帰つてしまったので、クレイグは親戚の手で大きくなったのだが、その預かり主の一家がまたはなはだ放浪的で、アメリカ各州を転々として移り住んだ。こういう遺伝と環境の中に人となつたライス夫人が彼女自身一個のボヘミアンであつたことは寧ろ当然である。

乱歩は案外ゴシップ好きだったのかもしれないね。大御所が身近に感じられます。

また、黄金期のイギリス四大女流作家の一人で、『幽霊の死』(服部達訳・ハヤカワミステリ文庫)などで知られるマージェリー・アリンガムの項では、

……ニューヨークタイムズの書評誌にのつた写真は、近影らしく、すつかり痩せていい姿になっている。前の丸々とした顔と違って面長になり、につこり笑っている目が可愛らしく、中年の色気みたいなものが感じられる。概して女流探偵作家には美人が多い。クリスティーなどは昔はなかなか色つばい美人だつた。若い頃のセイヤーズも色気はないが、智識のないいい顔だったし、「時の娘」のジョセフィン・テイもクリスティーと似た顔立ちで悪くはない。アメリカのエバハートの若い時の写真は明治期のはすつばな玄人女という感じの色つばさをもっているし、「鉄の門」のマーガレット・ミラーなどもなかなか美しい。

と、アリンガムの話から脱線して、今ならちょっとセクハラとも言われかねない、「ミステリ作家美人比べ」を書いていてご愛嬌です。

翻訳ミステリに関する乱歩の業績としては全集の監修も忘れてはいけません。乱歩が監修や編集にかかわった全集は多数ありますが、その中でも全八十巻におよぶ世界推理小説全集（東京創元社）が一番大がかりなものでしょう。監修は乱歩のほか植草甚一、大岡昇平、吉田健一といったメンバーが名を連ねています。

第一巻はイズレイル・ザングウィル、ポーという推理小説の起源というべき顔ぶれで始まります。第二巻以降ドイル、ガストン・ルルー、チェスタトンと続き、あとはクリスティ、クイーン、ヴァン・ダイン、クロフツ等本格ものから、モーム、ハメット、ジョン・バカンまで幅広い作品を収めています。並んでいる題名を見ると、すばらしいとしかいいようがなく、ため息が出ます。私はこの全集を四冊だけ持っています。中学生の頃古本屋さんで買ったものです。全集とはいうものの、コンパクトな装丁でデザインもすっきりとして可愛らしく、当時からお気に入りでした。あの時すでに大人だったら、まちがいなく全巻いっぺんに買っていたらと思うます。

翻訳者陣では当時活躍していた翻訳家にまじって、西脇順三郎、木々高太郎ら作家の名前が散見できます。A. E. W. メースンの『矢の家』を訳したのは、丸谷才一、中村真一郎とともに『深夜の散歩』（講談社文庫）という海外ミステリ評論集を出し（もともとはエラリークイーンズミステリマガジンに連載していたものです）、加田怜太郎のペンネーム（ダレダロウカという言葉のアナグラムです）で自身も推理小説を書いていた大のミステリ好きの福永武彦ですし、監修の大岡昇平もイーデン・フィルポットの『赤毛のレッドメーン』を訳しています。メースン、フィルポットともにミステリ以外が本業の作家でしたから、原著者、翻訳者ともに文学者という興味深い組み合わせですね。

さて、『海外探偵小説作家と作品』話を戻すと、乱歩はフィルポットの項で『赤毛のレッドメーン』を手放しで激賞しています。ウィリアム・アイリッシュ『幻の女』やロジャー・スカーレット『エンジェル家の殺人』（大庭忠男訳・創元推理文庫）とともに乱歩を夢中にさせた作品なのです。

『赤毛のレッドメーン』は「英文壇の老大家」であるフィルポットが六十歳を過ぎてから余技として書いたミステリです。乱歩はまずフィルポットの経歴

を紹介し、それから『赤毛のレッドメーン』を詳細に解題し、その長所をほめています。実際に読んでからそんなに時間をおかずに書いた文章なのか、読み進むにつれて印象が変化していく様子がいきいきと書かれています。次第に引き込まれ、夢中になって読んでいる乱歩の姿が目に見えてくるような文章です。そして読後すぐの感想の後には、読み終わって「五日から十日」たったからの印象もあります。

……読者の心に、又してもがらりと変わった第三弾の印象が形造られてくるのだ。万華鏡は最後の絢爛たる色彩を展開するのだ。物語のこまごまとした筋は一日一日と読者の記憶から薄らいで行く、謎の面白さもガンス大探偵の論理も、到底永い命はない。だがそれと反比例して、何とも名状し難い「色彩」が刻々とその色合いを濃かにして、読者の暗黒な心の中に拡がって行く。それはたとえば「眼花」と言われる臉の裏のこの世のものではない絢爛たる色彩、闇の中の虹である。

さすが乱歩です。この熱烈なほめ言葉は、それ自体が一つの世界を作っているではありませんか。

私が初めて『探偵小説四十年』を読んだ八十年代前半と今では翻訳ミステリを取り巻く状況はあまりに違います。クラシック・ブームが訪れ、黄金期の作品が格段に手に入りやすくなっている状況は嬉しい限りです。翻訳ミステリの普及につとめた乱歩の活動は、無駄になってはいなかったのです。

乱歩は作風に悩み、ある時期から小説の執筆をやめ、評論に力を入れるようになったといえます。「うつし世は夢、夜の夢こそまこと」とは乱歩自身の言葉ですが、小説を書くという本業が「うつし世」なのだとしたら、情熱をかたむけ、無邪気に楽しむことのできた海外ミステリは、乱歩にとっては「夜の夢」であり、「まこと」であったのかもしれない。

辞書をめぐる3つの話

翻訳の世界には辞書に関する面白い言葉がいくつかある。以前にも紹介したことがあるが、そのひとつはこうだ。「たかが辞書、信じるは馬鹿、引かぬは大馬鹿」

まずは辞書を信じた話から。

信じるは馬鹿

翻訳をやっていて知らない言葉や見慣れない表現にぶつかると、まずは辞書を引く。簡単に解決がつけばいいが、いくつかの辞書で納得できる答えがでてこない場合だってある。焦ってつぎつぎに辞書を引く、インターネットの検索サイトで用例を探し、あっという間に1時間ほどがすぎる。困り果てたあげく、訳し終わってから調べようと考え、つぎの部分翻訳しようと原文を読んだとたんに、思わず悲鳴をあげる。つぎの部分に、分からなかった語や表現の意味が解説してあるではないか。いくら事前に原文を読んでいても、細かな疑問点にまでは神経が行き届かないので、こういう失敗をする。

こういう経験はたぶん、翻訳者ならだれでももっている。どんな辞書よりも、どんな資料よりも頼りになるのは原文なのだ。原文を深く読めば、分からなかった点のうちかなりの部分に分かるようになる。もちろん、分からなかった語や表現の意味がつぎの行に書いてあるとは限らない。100ページも後ろに書いてあるかもしれない。

水田洋監訳、杉山忠平訳『国富論』（岩波文庫）の第1編第11章（第1巻287～288ページ）に以下の文章があり、訳注がついている。

しかし土地の改良と耕作によって一家族の労働が二家族に食料を用意するようになると、社会の半分の労働が全体に食料を用意するにたりますようになる。したがって他の半分、あるいは少なくともその大部分は、他のものを用意することに、つまり人類の他の欲望や好みを満足させることに使用される。衣服、住居、家具、およびいわゆる身のまわりの品物(1)がそうした欲望や好みの主な対象である。……

(1) 身のまわりの品物 equipage とは陶磁器やガラスなど家庭用具の小物のこと。ティー・セットをティー・エキページともいう。OEDは、スミス

の文章を用例としてあげる。

たぶん、なんで訳注をつけたのか不思議に思えるだろうが、つけなければならない理由があった。もう40年近くも前の話になるが、竹内謙二が『誤訳 - 大学教授の頭の程』（潮文社）で水田洋訳『国富論』（河出書房新社）のこの部分の訳を誤訳だと指摘した経緯がある。竹内は自分の訳（有斐閣、後に改造文庫、東大出版会などで改訂版）の「馬車」「馬車供廻り」が正訳であり、水田訳の「身のまわりの道具」は誤訳だと断じた。そこで水田が、OED（オックスフォード英語辞典）にこう書かれていると反論したのだ。

OED といえば英語辞書の最高権威だ。OED にこう書いてあるといわれれば、たいていの学者は納得するのだろうか。だが、翻訳者はそうは考えない。OED といえどもたかが辞書、人間が書いたものだから間違いもある。「信じるのは馬鹿」なのだ。

じつをいうと、引用した部分で equipage は食料以外に欲望の対象になるものの例として書かれているにすぎないので、「馬車」と解釈しても「身のまわりの品物」と解釈しても、たいした違いはない。この語にはどちらの意味もあるのだから、OED にもそう書いてあるのだから、それに、「馬車」も「身のまわりの品物」も欲望の対象になるものだから、どちらと解釈しても原著者の意図を誤解する結果にはならない。

だが、『国富論』でこの語は何回が使われていて、なかにはどちらと解釈してもいいとはいえない箇所もある。ひとつは竹内謙二が指摘した第2編第3章の終わり近くで、もうひとつは第5編第3章の最後の段落、つまりこの長い長い本の最後の段落でこの語が使われている。たぶん第1編第11章の訳注で equipage の意味は明らかになったと水田洋は考えたのだろう（OED にそう書いてあるのだから）。この2つの部分でも「身のまわりの品」（第2巻140ページ）「道具一式」（第4巻358ページ）と訳している。

第2編第3章の用例については、竹内謙二が「身のまわりの品」では誤訳になる理由を説明しているのだが、じつはこの説明があまりよくない。感情的になりすぎて、説得力に欠けるのだ。だが、この部分を数

ページ前からよく読んでみると、竹内が論じた通り、「身のまわりの品」ではまずいことが分かる。スミスは、金持ちの収入の使い道を「その場で消費されて、何も残らないもの」と「耐久性があって後に残るもの」とに分け、「何も残らないもの」の例として equipage をあげているのだ。「身のまわりの品」には耐久性があり、「馬車供廻り」（馬車のお供をする家来）を雇うのに金を使えば「何も残らない」。この文脈では「身のまわりの品」が誤訳であるのは明らかだ。OED に何と書かれていようと、たかが辞書であり、信じるは馬鹿なのだ。

引かぬは大馬鹿

同じ『国富論』第2編第5章の最後の段落につぎの文がある。大河内一男監訳（中公文庫）第1巻 585ページから引用しよう。

……たしかにこの数年間、投機的企業家たちは、ヨーロッパのいたるところで、土地の耕作と改良によってあげられる利潤について大げさな説明をして、大衆を喜ばせてきた。……

「投機的企業家」は原文では projector であり、いまの言葉でいえば「起業家」だろうが、原著者が蛇蝎（だかつ）のごとくに嫌った人たちだ。訳文の「土地の耕作と改良」とは、たとえば未開の原野を開拓する事業などを意味しており、出資を募ってそうした事業を進めていたのが projector だ。

だが、projector がなぜ「大衆を喜ばせてきた」のだろう。嘶家でも講演屋でもないのに。答えは簡単に見つかる。原文は amused the public である。この amuse を「喜ばせる」と常識通りに解釈したのだ。辞書を引けば amuse には違った意味もでている。普通の英和辞典でも、もともとは「だます」という意味だったことが分かる。そして、少し大きな辞書を引くと、この語がもともと divert の意味だったことが分かる。真実から気をそらせると「だます」になるし、憂世から気をそらせると「楽しませる」になる。辞書を引けば、解釈を間違えることはなかったはずだ。引かぬは大馬鹿なのだ。

すぐれた辞書は大馬鹿が作る

- 山口翼編『日本語大シソーラス』（大修館）

ついでにといっちは何だが、大馬鹿の例をもうひとつ。ただし、ここでいう「大馬鹿」の意味は少し違う。素晴らしい仕事ができるのは賢い人ではない。世間では大馬鹿といわれる人だけである。そういう例として山口翼編『日本語大シソーラス』を紹介したい。

辞書を買うと、まず「前書き」など、編者の文章を読む。この辞書では「跋語」と題された後書きが秀逸だ。編者は1970年頃に小説を書いていたが、「お話にならない代物」しか書けなかった。語彙が不足していると考えて、日本語シソーラスを作ろうと考えたのだという。そうして30年かかってできたのが、1500ページもの大シソーラスなのだという。

世の中には馬鹿がいるものだと嬉しくなった。頭が切れて、才気溢れ、機を見るに敏、そういう人なら、これほど労多くして功少ない仕事に取り組もうとは思わないだろう。馬鹿に徹することができる人、みずからの愚を知る人、ほんとうに役立つ仕事ができるのはそういう人だけだ。

おそらく、日本人は辞書が大好きなのだと思う。大

きな書店に行って辞書の棚に行くと、よくこんなものまでと思えるような辞書が大量に並んでいる。国語辞典や各種の外国語辞典はもちろん、新語の辞典、諺の辞典、俗語の辞典、多種多様な専門用語辞典などがある。だが、大きな穴があると以前から思っていた。大きな穴は類語辞典だ。つい1年ほど前まで、本格的な類語辞典はひとつもなかった。芳賀矢一校閲・志田義秀・佐伯常磨編『類語の辞典』（講談社学術文庫）が唯一、面白い類語辞典だったが、何しろ明治42年初版発行だから、古い言葉しかでていない。

たぶん、語彙不足という問題は、自分で何かを書くときよりも、翻訳するときの方がはるかに深刻である。自分で文章を書くのであれば、自分が考えた範囲で書くしかなく、考えた範囲は自分の語彙で表現できる範囲でもある。だから通常なら、語彙が不足してうまく書けないと感じることはそれほど多くはないはずだ（小説を書いて自分の語彙不足に気づいたというのは、じつは大変なことだと思う）。ところが翻訳の場合には、原著者が考えたことを日本語で表現する。自分なら考えないことを日本語で表現する。語彙が不足する場面が出てくるのは避けられない。だから、語彙

不足は翻訳者に共通の悩みだ。英和辞典がある程度まで、類語辞典の役割を果たしてくれることがあるが、それにも限度がある。

そういうわけで、以前から類語辞典には興味があった。世の中になかったら作ってみようかと考えたことも一度や二度ではない。だが、とんでもない作業になることが目に見えているので踏み切れなかった。ほんとうに役立つ辞書を作る人は、たぶん、とんでもない作業になることを予想できないか、予想しながら知らないふりができるか、どちらかなのだろう。

昨年秋に、講談社から『類語大辞典』が刊行された。この辞書は柴田武という大御所が編者のひとりになっており、50人以上が執筆や調査に参加しているというのだから、ある程度のものができて当たり前だともいえる。『日本語大シソーラス』は個人の力で作られたものであり、性格がまったく違う。個人辞書には限界もあるが、編者の主張が強くあらわれた面白い辞書になる可能性もある。

まず限界について。個人の力によるものだから、類語を集めるだけで精一杯であり、語義、つまり類語の意味の違いを書いていくことまではできない。『類語大辞典』の特徴が語義を示したことにあるとするなら、『日本語大シソーラス』はひたすら類語を集めたことに特徴がある。語義がないから使いにくいという印象をもつ人もいるだろう。この点で、『日本語大シソーラス』は一般向けの辞書ではない。プロ向けの辞書になった。

つぎに面白さについて。たとえば「0385 賢い」の項を引くと、横書き2段組みで2ページ半にわたって、「01 知的」「02 有識」「03 見識」から「16 愚者も一得」まで、16に分けてさまざまな語や表現が並んでいる。たとえば「07 賢い」だけでも、「賢い 賢しい 賢賢し オオし スマート」以下、100を超える語や表現が並んでいる。「0385 賢い」の全体ではなく、1000に近い語や表現が並んでいるのだ。もちろん、古い言葉や知らない言葉も多いので、実際に使えるのは半分以下だが、それでも選択肢がこれほど示されているのはありがたい。

なかでもとくに目につくのは、「賢は愚にかえる」「大賢は愚なるがごとし」「愚も愚を守れば愚ならず」などの名句がたくさん並んでいる点だ。数は少ないが、「対語」「関連語」なども示されている。文章を書くときに欲しい表現が並んでいるのだ。欲をいえ

ば、名句は古代中国や聖書のものに偏っているようで、近代、現代のものが少ない。それでも、単語だけを集めた類語辞典にはない良さがある。

この1年ほどで大きな類語辞典が2点も出版されたのだから、類語辞典を作りたいという衝動もなくなるかもしれない。だが、大きな不満がひとつ残っている。『類語大辞典』も『日本語大シソーラス』もロジェズに範をとった分類型の類語辞典だ。語を意味によって分類し、類語を並べていく方式である。

類語辞典にはこれ以外に非分類型のものがある。英語のシソーラスは非分類型の方が多いようだが、手元にある日本語の類語時点のうち、非分類型は前述の『類語の辞典』だけだ。『類語の辞典』では、国語辞典と同じ順番に並んだ語にひとつずつ、類語が紹介されている。それも若干の語義がついて大量の類語が並んでいる。この方式の類語辞典で、反対語、関連語、連想される表現、諺、決まり文句などが入っているものがあればと思う。インターネットにはそれに近いサイトがあるが、まだまだ不十分だ。

Google

安藤 進 著
A5判・160頁

本体価格 1,600円(税別)

Google(グーグル)を**表現検索ツール**として利用するノウハウを集大成。インターネットを生きる「**表現辞典**」として使いこなすコツがわかる。

好評発売中

技術翻訳のための インターネット活用法

安藤 進 著

A5判・146頁 本体価格 1,800円(税別)

丸 善〔出版事業部〕<http://pub.maruzen.co.jp/>

〒103-8245 東京都中央区日本橋 2-3-10 TEL 03-3272-0521



掛かり方 その1

掛かり方を規則的に説明された覚えはまず無い。多くの英文解説書を見ると、またそれが実力のある筆者であればあるほど、掛かり方が鮮明な日本語訳をつけてくれている。なるほどと感心はするのだが、何故そういう掛かり方になるかの説明はなく、掛かり方の法則性はブラックボックスに入ったまま。結局、数読んで身体で慣れるよりしかたがないのかと諦めにも似た気持ちになってしまうのが、英語学習者の通例たどる道ではなかったろうか。

確かに、慣れるのが一番であり、また掛かり方の法則はないのである。しかし一方、英語はカンや経験だけで読み通すようにできている不合理な言語ではない。法則とまではいかないが、準則といえるものはあるのであり、また慣れを常識・論理・文脈などと刷り合わせれば、読む精度を確実に高めてゆけるのである。

まず、準則とでもいえるものを三つ挙げる。

(1) **A文 that B文 + that C文 は、A文 (that B文 + that C文) と読む**

A文 that B文 + C文 は、(A文 that B文) + (C文) と読む

* 文とは S + V のこと

二つの違いがはっきりわかる例からはじめよう。

例：He said that his father has gone out, but that his mother was at home.

「お父さんがいっちゃったのに、お母さんは家にいる、と彼はいった」だが、あとの that をはずし、He said that his father has gone out, but his mother was at home. では「お父さんがいっちゃったと彼が言ったのに、お母さんは家にいた」になる。

次の文などは論理が明確なので、準則を知らない人でも自然に正しく訳せるはずだ。

例：The first great lesson a young man should learn is that he knows nothing, and that he is of but very little value.

(若者が学ばねばならない最初の大切な教訓は、自分にも知らない、そして自分は取るに足らない価値しかない、ということである)

ところが、上記の準則をしっかりと認識していないと、語調のよさに流されて間違った訳をつけてしまうこともあり得る。

例：Don't forget that critics often make mistakes, and you who read are the final judge of the value to you of the book you are reading.

「批評家もよく間違えることがあり、読んでいる自分こそがいま読んでいる本の価値を最終的に決めるのだということを、忘れてはならない」は日本語として自然に読め、論理的にも問題なさそうだからかえってくせもの。

正しい訳は、

(批評家とて間違いを犯すことがあるのを忘れてはならないし、本の価値を最終的に決めるのはそれを読んでいる自分自身なのです)

次も and の前後を一つづきに訳していまいそうな原文だ。

例：You can imagine that the London ladies were indignant, and naturally they started disseminating a vast amount of fruity gossip about the new Lady Turton.

(ロンドンの淑女がたが大層気分を害されたことはおわかりでしょう。それで、淑女がたは新しいレディ・タートンの艶笑話をたっぷりと撒き散らしたのも当然でした)

主文に等しく掛かるしるしは、ふたつの that が並列していることだが、前の that が省略されることはよくある。なくても意味は判るのでいいようなものの、厄介なことに後の that がないのにあるように読まねばならないことがままある。これは、ふたつの従属節のながれ(因果・一体感など)が一続きとして読める、ふたつの従属節の動詞が be 動詞である、誤文、の場合に多い。その例をひとつ挙げる。

例：The middle-class American isn't in his heart, sure that even the rebels are altogether wrong. Some, in fact, agreed that young people were not unduly critical of their country, and their criticism was actually needed.

(中流階級のアメリカ人は心の底では、反抗する連中とて悪くないのだと思っている。それどころか、若者たちはわけもなくこの国に批判的なのではなく、彼らの批判とて実際に必要なのだ、と考えている人たちもいる)

この文、あとの that がないからと and 以下を agree に掛けずに読むと、論理展開が見えなくなるはずだ。

(2)形容詞+名詞+名詞 は、形容詞(名詞+名詞)と掛けてやる
意味が通りにくければ、(形容詞+名詞)+(名詞)と読んでみる

例：local drama festival

「田舎芝居のお祭り」でなく、「地元の演劇祭」

変形で、形容詞+名詞 and 名詞+名詞 は、形容詞{(名詞 and 名詞)名詞}

例：There are vast mountain and highland areas in the north and fertile plains in the south.

「広大な山岳と高原地帯」は、vast が名詞 mountain を修飾する形容詞、highland が名詞 areas を修飾する名詞の形容詞的用法ととった訳だが、mountain に冠詞も複数の s もないのはおかしい。mountain、highland と名詞 areas に掛かる名詞の形容詞的用法、「広大な山岳・高原地帯」と読まねばならない。

名詞+名詞+修飾語の場合も同じ扱い。

例：Biological science must have begun with observation of plants and animals useful to man. (生物学は人間にとって有用な植物や動物の観察からはじまったに違いない)

ところが論理的にそう読んではまずい、次のような場合もある。

例：What we should aim at producing is men who possess both culture and expert knowledge in some special direction.

ここは「ある特別な分野での教養と専門知識を有する」とは読めない。「教養」は専門的でなく、幅広いものだからである。幅広い知識と高度な専門知識がともに求められると知っている。「我々は教養と何らかの分野での専門知識をもつ人間を作り出そうとせねばならない」

(3)A 語・句+B 語・句+修飾語は、(A 語・句+B 語・句)修飾語とまず読み、通じにくければ(A 語・句)+(B 語・句+修飾語)と読む

* (2)(3)ともに、均衡を重んじる英語の性格からくるものといえる。

一番簡単な例から。

例：We find there Tom and Dick with heavy bags.

(そこには重い荷物を抱えたトムとディックがいた)

「トムと重い荷物を抱えたディック」と読めないこともないが、常識的には両者に掛かる。

日本語で「美しい山と川」といった場合、美しいのは山と川の両方と取るのが順当なのと同じ。

時により、両方に掛かることをはっきり示すしるしが見られる。

例：No man wholly escapes from the kind, or wholly surpasses the degree, of culture which he acquired from his early environment.

of の前のカンマが、of 以下は等しく the kind と the degree に掛かることを示している。

(誰も子供のころの環境の型をすっかり逃れたり、その質をすっかり越えることはない)

とはいえ、両方に掛かるか、後のほうにのみ掛かるか分りにくい文が結構ある。

例：Queen Elizabeth delighted in the flattery of her suitors and of the poets who crowded her court and dedicated their books to her.

who 以下は her suitors と the poets の両方に掛かるのか、それとも the poets に掛かるのだろうか？ the を限定する who 以下と、二つの of により、the poets のみに掛かると読める。

(エリザベス女王は、求婚してくる相手や宮廷に出入りし自分に書物を捧げる詩人たちの称賛の言葉を嬉しく思った)

例：Frequent moves and self-care situations for children of working parents are common.

親の事情により子供の引越はしょっちゅうあるとも言えるが、引越しやかぎっ子状態は珍しくないともとれる。文脈から判断するしかない。

(共稼ぎの両親をもつ子供がしょっちゅう引越ししたり自分の面倒を自分で見なければならぬことはよくある)

または、

(頻繁な引越しや共稼ぎの親をもつ子供がかぎっ子状態となるのはごく普通だ)

例：For Dr. Finlay a garden is both an artist's canvas and a philosopher's blackboard on which to compose a complex statement of ideas and beliefs.

on which 以下は、an artist's canvas と a philosopher's blackboard 両方に掛かるのか、後の a philosopher's blackboard にのみ掛かるのか？ この一文を読むかぎ

りではどちらともれそう。

(フィンレイ博士にとって庭はアーティストのキャンパスであり、哲学者が深い理念や思想を書き記すための黒板です)

(フィンレイ博士にとって庭は輻輳した理念や信念をそこに書きこむべき、アーティストのキャンパスであり哲学者の黒板なのです)

ではこれは。掛かり方と日本語に置き換えた場合の座りのよさの両面から考える必要がでてくる。

例：In the political life of democracies we see men enthusiastically supported and really admired with sincerity so long as they remain in opposition.

「心より支持され」+「心より実際に称賛される」のか、「支持され」+「心より実際に称賛される」のか？

どちらともれそうだが、英語の均整を重んじる性質から、with sincerity は両方に掛かるととったほうが良いだろう。かといって、そのまま訳をつけるとうる

さくなるから、日本語のバランスに配慮しなければならない。

後の部分、「本当の誠実な称賛」ということだから、並列する前の部分と言葉の格と量を短めにそろえて、まず次のようにしてみた。

(民主主義国家の政治の世界において、野党にとどまっているかぎり、代議士は心より支持され真摯に称賛される)

長さや格はよさそうだが、「真摯」と「称賛」の口開けが今一つ。

ならばもう一考して、さらにすっきりさせてみる。

(民主主義国家の政治の世界では、野にあるかぎり、政治家は民衆の心からなる支持と声援を受ける。)

さっぱりしすぎて、掛かり方に注意を払った割りにそれが生きていないだろうか。好みの問題ともいえようが、私はこれでいいと思う。考えた過程は、全体の訳文に、力となってきっとでてくるはずだ。

**** 来春開講 柴田耕太郎 主宰 「翻訳ジム」 受講生募集のお知らせ ****

『英文教室』の秋季募集は締め切りました。

今回は、来春開講、1年間徹底して英文を読み解く全日制「翻訳ジム」のお知らせです。

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現場を踏んだ人間でなけ

ればわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

事務担当 前川

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町 7-6 ID河田町ビル